

NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.15(1)

2012(春号)



きのくに活性化センター

発行責任者／中田肇 発行日／2011年3月31日
〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9
和歌山県立情報交流センター ビッグ・ユー内
TEL&FAX0739-26-9670
<http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/>

設立10周年を迎える春に

きのくに活性化センター会長 中田 肇



大塔村熊野(いや)の被災地にも梅は、ことしも咲いた



2011年3月11日、わたしたちは東日本大震災並びに東京電力福島原子力発電所事故と、日本の歴史に将来にわたって語り継がれる大震災に見舞われました。あれから1年が経ちました。被災地はまだ、復興の緒についたばかりで、被災した皆様の境遇を思うとき、かける言葉がみつかりません。そして、9月に相次いで紀伊半島南部を襲った台風12号、15号は紀南地域の各地で多くの人命を奪い、明治22年の大水害もかくやと思わせる、甚大な被害をもたらし、地域経済に深刻な影響を与えていました。それでも、わたしたちは前を向き、一歩を踏み出さなくてはなりません。

そうしたなかで、きのくに活性化センターはことし4月に設立10周年を迎えることになりました。きのくに活性化センターが、紀南地域の活性化をめざす初めての産官学連携組織として、田辺市に事務所を置いて産声を上げたのは、2002年4月27日でした。近くで遠い存在だった和歌山大学が紀南地域に歩み寄って来て、地域のなかで地域と連携をしながら、自治体や経済団体からの各種の事業を受託するとともに、地域との共同事業や独自事業を開拓してきました。これは、ひとえに地域の関係機関の皆様方の温かいご支援の賜物であり厚く感謝申し上げます。

きのくに活性化センターが刻んだ10年間に、わたしたちを取り巻く環境はずい分と変わりました。平成の市町村合併で8つの町村が消え、高速道路の田辺までの南伸、熊野三山と古道をはじめとした紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産に登録され、各地の各分野で地域の活性化、再生を図る取り組みが広がってきました。しかし、地域経済が直面する環境は農林水産業をふくめてきびしく、また近い将来予想される南海・東南海地震への対応など急がれる課題が数多くあります。

10周年を迎えるきのくに活性化センターは、地域のために何ができるのか、真摯に自問自答をするとともに、関係機関の皆様方とより一層連携を図りながら運営に努めてまいりたいと存じますのでよろしくお願ひ申し上げます。

CONTENTS

- ・設立10周年を迎える春に 中田肇 1面
- ・災害を乗り越えて 勢古啓子 2面
- ・災害を乗り越えて 西村潤 3面
- ・きのくに活性化センター設立10周年、ほか 4面

災害を乗り越えて

新宮市・仲之町商店街振興組合副理事長 勢古啓子



「元気でいこら！」災害復興イベント風景

激しい雨が降り続いている9月3日深夜、「熊野川が氾濫する恐れあり」という情報があり、商店街に危険を知らせる放送を入れ状況を見守っていた。台風は遠ざかったはずだったが降水量はいまだ衰えず、私が営む店内まで水が押し寄せ、あっという間に膝の高さまで浸水、必死に水を汲み出すも全く追いつかない状況になった。それもそのはず、商店街通りはまるで濁流が流れる大川のようになっており、私たちはただ呆然と見守ることしかできなかった。

早朝やっと水が引き始め、各店主が店内の泥をかき出し始め、一日中かかり掃除をした。この日は自分たちのことだけで必死だったので、まさか相筋や熊野川町、那智勝浦町があのような災害に見舞われていたとは全く知らず、その後の報道などでその被害の大きさに驚かされた。また熊野市と那智勝浦町で鉄橋が寸断されこの地域はまさに陸の孤島となり、学校は休校、仕事どころではなくなった。

当市では9月3日を含めて3日間断水が続いたため、給水車に水を貰う人の列ができ、街中のあちこちには泥水に浸かった畳や家具、電化製品が山積みされ異臭を放っていた。そんな中でも山水を持って来てくれたり、近くの井戸水を分け合ったり、人の心の温かさを改めて感じることもあった。

その後ライフラインが立ち上がってからも街中が沈んでいて、消費も落ち込み、街の経済はどん底状態であった。どこかで区切

りをつけて復旧しなければという焦りもあったが、まだ立ち直っていない地域のことを考えると動きづらい状況が続いていた。

そのような中、11月に各商店街の代表が集まり、年末目標に街を元気づけるため、「元気でいこら！」をテーマにイベントを実施することとなった。このイベントを「災害復興イベント」として位置づけ12月10日に開催、各商店街で踊りや屋台、ゲームなど、それぞれにできることを行った。来場した市民の皆さんからも笑顔があふれ、このイベントをきっかけに、商店街も少しずつ元気を取り戻し、お客様も戻ってきてくれ始めた。しかし、受けた心の傷が大きすぎて、癒えるにはまだまだ時間がかかる事実である。

この台風災害で、いつ起るかわからない自然災害の恐ろしさを知り、日頃からの危機管理がいかに重要かを強く感じた。私達の商店街は高齢の店主が多く、災害時の誘導をどう行うかが大きな課題であり、避難場所の特定やマップ作り、避難訓練の実施などを現在検討中である。また最近4年以内に必ず地震が起きると発表されており、商店街でも災害時の情報の共有とその伝達手段を明確化することも検討していくなければならないだろう。その中で私達個々の役割は、お互いに声を掛け合うなど、日頃から地域のつながりを大事にすることが重要で、この毎日の取り組みが災害による被害を最小限に食い止めることにつながっていくのではないかでしょうか。

災害を乗り越えて

三川元気夢来プロジェクト代表・三川地域振興推進会会长 西村潤



私が住む三川地域(旧大塔村=現田辺市)は、市街地から車で約60分から90分の山間部にあります。11の地区があり、世帯数は276戸で、高齢化率は50%を超えていました。「限界集落」地区もあらわれています。三川元気夢来プロジェクトは、無農薬・有機栽培を基本にした農業によって、自分たちが栽培し食べている食べ物を販売し、都市と山村の交流を図っていくことを目的に結成しました。この会には、向山、合川、熊野、五味など人が住んでいる三川地区の68戸が参加し、三川夢来人の館の運営とアユ研究会を設けて、地域住民みずからが主体となって元気を取り戻す事業を展開しています。

三川夢来人の館事業は、耕作放棄地30アールを利用した農園でコメや野菜、山野草、花、椎茸、お茶などをつくり、田辺市南新町の海蔵寺通りの貸店舗を借りて販売しています。年会費1,000円を払っている世帯が出荷できる仕組みで、地区にある障害者施設あすなろも会員として参加しています。

あの日、私は五味の自宅にいました。百間山の事務所が壊れ、メンバーの家も流されました。9月12日朝6時半ごろのことです。下流の深谷と上流の木守への道が倒木などで寸断され、三川地区は陸の孤島状態になりました。とくに熊野は土砂ダムが出現し、9月から12月まで地区内は立ち入り禁止になり、またプロジェクトのメンバーが犠牲になりました。また、住民の多くは、普段から自給自足的な生活で買いためした食料はありましたが、電気、電話、水道が使えず情報が乏しく、不便を強いられました。救助に参加もできない、連絡もつかないなかで、悶々とした毎日を過ごすことになりました。

そうしたなかで、11月に三川小学校で開かれた「三川お楽しみ会」には、バス2台で60人の方々が市街地から参加してくれました。販

売所をとおしてつながりができた人たちです。3月11日、今度はプロジェクトが主催し、熊野集会所を会場に交流会を開きました。28人が集まってくれました。当日は女性たちが地元の祝いやもてなしのご馳走であるばらずしや太巻きずしを作つて接待し、餅を搗きなごやかに交流の時間を持ちました。限界集落は山村にだけあるのではなく、高齢化が進む市街地の中にもある。夢来人の館は三川と町中の人びとの出会いの場になっており、あたらしい関係、コミュニティをつくりだしています。

熊野の一部は、家屋倒壊あるいは土砂に埋もれ屋根だけがかろうじてみえるなど、静かだった村の景観は一変し、無残なすがたをさらしています。清流も至る所で断ち切られ、川や道路の改修は進まず、住民が避難した地区ではいまも人が住んでいません。住みたくても住めないです。夢楽人の館には、熊野の人たちが野菜を出してくれていました。

山々も日ごと明るさを増してきました。被災地でも、生活が営まれています。和歌山県の元気プロジェクトの指定を受けるなか、今年度は利用する耕作放棄地をさらに増やしてコメ作りに取り組みます。

交流会は地域に元気をくれました、地域の立ちあがる元気が市街地の方の力にもなればと思います。三川には、これからもふるさとで暮らしていきたいと考えている人が多くいます。いまも、むかしも、ここに住むことに誇りを感じているのです。ここが好きなのです。いなかは交通不便で、買い物にも事欠き、かわいそうという同情は、都会の人の勘違いです。都会が思っているほど、私たち、いなかの人間は生活が不便だとは感じていません。私たちは、いなかのよさを都会の人にも、田舎の人にも知ってもらいたい。誇りの持てるやり方で、ふるさとを元気にしたい、と考えています。(談 編集室まとめ)



三川交流会(熊野集会所)

きのくに 2011(平成23)年度「伝統食文化ブラッシュアップ事業」

「郷土料理・伝統食文化」の研究成果をもとに、あたらしい熊野の食の魅力を発信するための商品開発等を目的に、わかやま産業振興財団ときのくに活性化センターの共同で2011年7月から取り組んだのが、伝統食ブラッシュアップ事業。研究会(座長きのくに活性化センター鈴木裕範事務局長)は、生産者・飲食店・観光事業者・大学研究者など10人あまりが参加し、試

作品作りなどをふまえて検討を重ねた。

その結果、地域の食材を活用したあらたなめはりすし(高菜・わさび葉利用)の食し方をまとめ、コメ需要の掘り起こし、6次産業化、食育活動などの面で期待がもてることが明らかになった。研究会は今後有志でさらに継続して研究し、商品化をめざす。

きのくに活性化センター設立10周年

4月21日、田辺市で記念式典・講演会を開催

きのくに活性化センターは、2002年4月に設立されて、今年で10周年になる。センターでは、これを記念して4月21日午後1時30分から田辺市新屋敷町・紀南文化会館小ホールで記念式典を開催。来賓あいさつのあと、この10年間の取り組みを紹介する。

引き続き、午後2時30分からは、静岡県商店街振興組合連合会理事長で富士宮市フードバレー推進協議会委員長の増田恭子さんが、「笑顔とまえかけ～商店街活性化と女性力～」と題して記念講演する。

講師の増田さんは、富士山本宮浅間神社の門前町、静岡県富士宮市の駅前で1918(大正7)年からつづく「曾我漬」増田屋本店のおかみさん。商店街が衰退する中、商店街のおかみさんたちに呼びかけ、富士宮駅前通り商店街おかみさんの会を2000年に結成。商店街のお店紹介マップの作成を契機に、毎月16日に開く「十六市」の開催、そのほか、すしやパンなどのオリジナル商品を開発したり、空き店舗の活用など、富士宮市商店街のおかみさんたちの活動は“商店街の活性化”から“まちづくり”へと広がり、商店街活性化の成功モデルと賞賛される。「シャッターリ通りからにぎわいのある駅前商店街へ」。留守番役のおかみさんが行動するとき『物語』の幕が上がる。

増田さんは、B級ご当地グルメブームを起こした「富士宮焼きそば学会」のメンバーでもあり、富士宮市が進める食のまちづくりのキイパーソン。2009年内閣府男女共同参画社会づくり「女性のチャレンジ賞」を受賞。

●設立記念式典・記念講演会の定員は450名、どなたでも入場は無料です。たくさんのご来場をお待ちしています。



当日講演いただく増田恭子さん

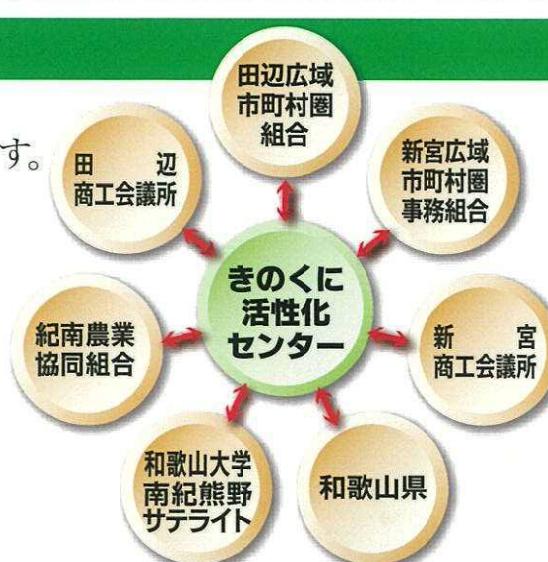


B級グルメブームを起こした富士宮焼きそば

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、以下の団体・機関で構成されています。
(2012年3月31日現在)

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

20数年ぶりの熊野。変わり果てた風景のなかに凛と咲く梅の美しさ。春の陽光の中で、馥郁と香りが匂う。2012・3・11、搗きたての餅をいただき、ぱらすしをご馳走になった。

かつて、わたしは足繁くこの土地に通い、古者にむかし話をせがんだ。会った人の多くは、明治・大正世代。時の経つのをしばし忘れた。その人たちのほとんどは、いまいない。人びとは変わったが、熊野に暮らす人の笑顔と心のやさしさ、花のある風景は変わらない。

豊かな暮らしとは何か、元教師であるプロジェクト代表西村潤さんの口調は穏やかだが、言葉は鋭い。「都会の人びとの勘違い」、に耳を澄まさなくてはならない。本当の理解とは何か、思いと価値を共有するところにあたらしいコミュニティ再生の可能性がある、と西村さんの言葉を聞いた。(ひ)